

AA 研共同利用・共同研究課題

「多元的想像・動態的現実としての「華人」をめぐる研究」

平成 23 年度第 2 回研究会

日時: 平成 23 年 10 月 30 日(日) 午後 2 時～午後 7 時

場所: AA 研 302 小会議室

■研究会プログラム

【報告 1】 三尾裕子 (AA 研所員)

「「華僑・華人」研究の視角に関する再検討」

【報告 2】 伏木香織 (AA 研ジュニアフェロー)

「戯劇と歌台—シンガポール旧暦 7 月の儀礼と芸能をめぐる記憶と実践」

平成 23 年度第 2 回研究会(通算第 2 回目)として、1 名の AA 研所員と 1 名の共同研究員より、各自の実地調査に基づく事例報告をしていただいた。

前半のプログラムでは三尾が、まず本共同研究会の中心的課題である華僑・華人研究の問題点の洗い出しを行なった。また、(プロト)グローバル化の議論に対する貢献可能性を示した上で、それら全体の問題系をベトナム・ホイアンの「明郷」に関する調査から具体的に提示した(⇒「報告 1」の要旨を参照)。

後半は伏木が、シンガポールで旧暦 7 月を中心に見られる儀礼・芸能に関する報告を行なった。特に、近年「シンガポールの」芸能として展開が見られる「歌台」にまつわる言説・実態について、自身の最新の調査を基に、「シンガポール性」が見え隠れする社会・政治的な背景を分析した(⇒「報告 2」の要旨を参照)。

なお今回から、AA 研外国人研究員として来所中の吳小安(Wu Xiao An)氏が、本共同研究課題と連携すべく研究会に参加され、「華人性」概念が形成される歴史・政治的コンテクストに注視する観点からの重要なコメントをいただいた。

(文責: 津田)

■「報告 1」の要旨

「「華僑・華人」研究の視角に関する再検討」

三尾裕子 (AA 研所員)

本発表では、主に次の3点に関して報告した。

第1は、本共同研究課題の根幹とも言うべき、いわゆる「華僑・華人」のアイデンティティの議論に関する従来の諸研究についての大まかなレビューを行うことで、「華僑・華人」研究の持つ問題点を提示し、それを乗り越える方策を本研究課題において模索することが必要であることを論じた。特に、最近、本質主義的な語りから脱却するために、様々な文脈によって多様な華人性が立ち上がる動態的な様態についての研究が盛んになってきていることを肯定しつつも、単なる中国系移民の分類学に終わることなく、他方一枚岩的な中国系移民像の再生産にならないような中国人性に関する理論的な突破口の模索が必要であることを指摘した。

第2には、発表者が最近取り組んでいる中国系移民の視点から人文社会科学への一つの新しい視座を提供する可能性のあるグローバリゼーション論に関して、その視点の概要及び有効性に関して論じた。昨今のグローバリゼーションに関する議論を相対化するものとしては、グローバルヒストリーの議論が盛んになってきており、前近代に遡るグローバリゼーションの「世界」としての中華世界に関しての研究が盛んになっている。しかし、人類学的な社会組織に関する研究は、構造的な枠組みから見る見方とは異なる、ローカルな社会が如何に「世界」とリンクしてきたのかを解明する手段として有用性を持っていることを指摘した。

最後に、上記第1、第2の視点に関して、発表者が主たる調査地の一つとしているベトナム中部の港町ホイアンを中心としての事例研究を提示した。発表者は、移住と定着によって中国人性をほぼ失っている状態に至った明郷人(元は、明香人と表記された。明の滅亡を機にベトナムに「亡命」した明の遺臣たちを起源とする土着化した中国系の人々)研究が、中国系であることが明白な人々についてアイデンティティを分析して中国人性を明かにするような循環論的アイデンティティ研究から逃れる一つの可能性として意味があることを指摘した。その上で、明の滅亡を機に東南アジア各地に「亡命」した遺臣たち及び彼らの子孫が共有したと思われる明朝の再興という目標について、これを「プロト」遠隔地ナショナリズムとみる視点について述べた。更にホイアンを中心とし商業活動を展開した中国系移民の同郷組織の持つ役割について考察した。従来の「華僑・華人」研究では、同郷組織がしばしば「華僑・華人」同士の間の相互扶助、ネットワークの形成という機能を持つことが指摘されている。しかし、本発表では、むしろ、海外から調達された物資が沿岸から主に内陸へ延びる河川によって、そのルートに沿って展開される同郷のネットワークを通じて内陸のローカルの社会に迅速に供給されたり、あるいは逆にローカルな社会で調達された物資が、海外へと流れ行ったりするルートとしてみることが必要であることを指摘した。このような観点から中国系移民のとらえなおすことで、前近代から東南アジアのローカルな社会がグローバルな市場ともリンクしていることが明らかにされることを明らかにした。

なお、本発表では、原則として「華僑」や「華人」を分析用語としてよりはむしろフォーク

タームとしてとらえるため、分析用語としては、地政学的な中国から別の場所へ移住して行った人々及びその子孫を、「中国系移民」という用語を用いた。

(文責: 三尾)

■「報告 2」の要旨

「戯劇と歌台—シンガポール旧暦 7 月の儀礼と芸能をめぐる記憶と実践」

伏木香織 (AA 研ジュニアフェロー)

本発表は、シンガポールの旧暦(農暦)7 月を中心に見られる、儀礼と芸能をめぐる語りと実践を概観したものである。シンガポールで現在、その Chinese の呼称が一部の人々の間で話題になっている Hungry Ghost Festival の時期はかつて、街戯(Chinese Street Opera)がさかんに行われていたが、1990 年代に急速に衰退して以降、現在ではわずかな人形劇を残して、街からほとんど消えてしまった。それに代わって行われるようになった、とされるのが歌台(ge-tai (福建語:ko-tai))である。

歌台はマレー半島(主としてシンガポールとマレーシア)の華人社会の旧暦 7 月に見られる「マンダリンの歌謡ショー」であるとされてきたが、シンガポールにおいてはその限りではない。シンガポールでは通年にわたって行われ、上演機会も寺院の祭礼や神明の千秋など、幅広いほか、通常は福建語をメインとする地方語とマンダリンを駆使した多言語の飛び交うステージ・ショーである。近年、シンガポール映画《881(パパイヤ、邦題「歌え!パパイヤ」)》がヒットしたこともある、シンガポールでは「歌台はシンガポール独自の文化」との語りが生まれ、2011 年の旧暦 7 月 1 日にはオーチャードロードからの歌台生中継が U-stream で行われるなど、急速に国内外にアピールするイベント化している。

しかしながら歌台は、当初から人々にとって、肯定的にとらえられるものではなかった。戯劇から歌台へと変わったことの是非、後ろめたさ、その変更の決定プロセスを語る語り口、歌台が 1950 年代には主としてミュージックホールのような酒場として存在していたことなどを語る語りには、マレーシアの華人社会とは異なる、シンガポールという環境独自の歌台の存在、歴史を窺うことができる。ただし若者たちの語りからは、シンガポール政府が積極的に売り出そうとしている姿勢もまた、現実とは異なっていることを示唆する。観ているのは老人ばかり、と揶揄しながら、その実、いくつもの地方語が飛び交い、それぞれの言語に特有の言い回しを理解し、それらの言語差によって生まれるジョーク、コメディを理解することができないため、スピーチマンダリン運動などで地方語を話す機会を失った若者たちは、歌台を純粹に楽しむことができない。そのため、歌台に若者が集まつくることはほとんどなく、「シンガポールの」といえるほどの人気を得ているとは言い難いのである。

そこで、もしこの歌台に「シンガポール性」があるとすれば、それはどこにあるのか。この点について、2010年から2011年にかけての調査記録をもとに、歌台の実態を探ってみた。歌台の上演機会は、各種コミュニティの記念日などのイベント(余興的使用)、寺廟(temple)の儀礼、宗教団体(神壇(Shintua))の儀礼、游境(Yew Keng)、神明の千秋などである。マレーシア華人社会の歌台のように旧暦7月に限定されず、寺廟でも行われるところに特徴があるが、戯劇に代わって行われるようになったからといって、戯劇が持っていた『加冠官』などの扮仙戯にあたるものは歌台にはない。またシンガポールの寺廟で行われる歌台(temple getai)には2種類あり、そのうちのひとつに神明との交流が重視されるものがあるところもシンガポールの歌台に特徴的なところである。神明に対して歌われる歌のレパートリーもあり(勸世歌)、神明を祝福、歓迎し、神明とともに楽しむ歌台が存在するのである。主として童乩が存在する寺廟、神壇が主催することが多いが、童乩に降臨する神明(大二爺伯、三爺伯、包貝爺、斎天大聖、法主公、濟公、南海善財童子、觀音など)がある意味 Show Off し、寺廟、神壇が、宣伝、寄付金集めを行うのである。こうした童乩儀礼の公開や、歌台の実践の背景には、シンガポールの宗教を巡る政策、地方語問題、教育問題、急速な高齢化社会や終末期医療の問題や、宗教団体と宗教ビジネス、エンターテインメント・ビジネスと宗教との結びつきなど、様々な問題が広がっている。それと同時に、このビジネスの問題は、「シンガポールの」芸能である歌台にインターナショナル・コネクションをもたらす。特に台湾とのコネクションは強く、台湾語と福建語の近似性から、台湾の古い歌謡曲(『望春風』など)が今でも歌い継がれているほか、台湾の流行、歌手をシンガポールに持ち込むようなことも盛んである。またマレーシアや中国本土からの出稼ぎ歌手が登場し、旧暦7月の繁忙期にだけ活躍してこの時期が去ると帰国するような事態もおこっている。

しかし現在、このような「シンガポールの」歌台に、ひとつの語りが加わり始めたように感じられる。「死者とともにある」という語り口である。これまで歌台は死者の儀礼である法事に使うことはなかった。Hungry Ghost(餓鬼)が地界に属するものだからとはいえ、死者と直接向き合うような形での歌台はなかったのである。しかし2011年8月には、「歌台は死者とともにある」という語りのもと、歌台を墓場で行ったり、法事で行ったりする事例が見られた。墓場の歌台も、法事の歌台も、シンガポールの一般的な人々にはよく知られたものではない。特に法事の歌台は「初耳」だという人もいて、非常に新しい存在であることがうかがわれた。こうした「死」にまつわる新たな語りは、新しい実践を主導する新たなコミュニティ/ネットワークを形成しているように見える。

国籍、「民族」、を超えて、その時々に現われる歌台は、戯劇が基本的に地方語コミュニティに根付き発達してきたのとは対照的である。しかしながら、その国際的なひろがりはまた、「シンガポール性」をアピールするものでもないと思われる。歌台において、何が表象され、それが誰によってどんな場合にどのように、どのように受容されているのか。それを探ることは、シンガポールにおけるコミュニティ/ネットワークの形成とその展開を

知る上で、ひとつの可能性をしめしていると思われる。

(文責: 伏木)